

5) 術後感染予防における抗生剤使用の一考察
—術後急性腎不全の治療を振り返って—

清水 武昭・篠川 主 (信楽園病院外科)
青木 信樹・関根 理 (同 内科)

最近9年間に426例の急性腎不全症例の治療に当たったが、うち132例の基礎疾患は消化器外科に関連するもので、76例は術後急性腎不全であった。胃癌、直腸癌などの癌腫の術後がもっとも多く、次いで肝胆道系疾患術後であった。腎不全の原因として、癌腫では縫合不全がもっとも多く、次いで尿管切断などの手術ミスの見落としが多かった。肝胆道疾患では肝内結石、総胆管結石の見落としが、既に腎不全が始まっている症例が多かった。術後急性腎不全とその他の急性腎不全とを比較すると、明らかに異なるのは、抗生剤の使用量であった。前者では2種、3種が多く、極端な症例では6種の抗生剤が使用され、ほとんどが極量に近く、基礎疾患と共に急性腎不全の原因または増悪因子と考えられた。セヘム系とアミノ配糖体の組合せが多くみられ、術後感染予防としての抗生剤使用として、適当かどうかも含め考察した。

6) 胃癌の大動脈周囲リンパ節郭清

佐々木 壽英・筒井 光広
田島 健三・佐野 宗明 (新潟県立ガンセンター 外科)
加藤 清・島田 寛治
赤井 貞彦

胃癌手術における大動脈周囲リンパ節(16番)郭清の問題点は、郭清の範囲とその適応にある。胃癌に関するリンパ流の2大集中点は腹腔動脈根部リンパ節(9番)と上腸間膜根部リンパ節(14番)で、ここより16番への転移経路が左と右のルートに分かれて、IMA根部のリンパ節まで下降した後に、Truncus lumbalisに流入して上方に向かう。

従って、郭清範囲は左腎静脈の上下で、下限はIMA根部のレベルまでである。

過去5年間の胃癌切除例のうち Sumpling も含めて16番を郭清した症例は114例で、進行胃癌切除例の約20%にあたる。組織学的に16番の転移陽性例は32例であった。

大動脈周囲リンパ節転移を郭清し、5年以上の長期生存例は3例である。

16番リンパ節の予防的郭清の適応：

PST 適応症例か9番転移例には左側16番を、14番転移例には右側16番の郭清を考えている。

7) 早期胃癌153例の臨床病理学的検討

吉岡 一典・阿部 僚一 (新潟県立吉田病院 外科)
三科 武 (新潟大学第一外科)
田中 乙雄

1977年1月より1986年10月までの約10年間の胃癌手術総数は602例であり、その中153例(25.4%)が早期胃癌であった。m 癌69例(45.1%)、sm 癌84例(54.9%)であり、占拠部位はAまたはMが大半で、肉眼型ではⅡcが43.2%であり陥凹型が64.8%を占め、組織型ではtub₁ 39.4%、tub₂ 28.4%の順で多かった。リンパ節転移は149例で検討し、転移率はm 癌でn(-) 95.4%、n₁(+) 3.1%、n₂(+) 1.5%、sm 癌でn(-) 77.4%、n₁(+) 17.9%、n₂(+) 4.8%であった。術式の大多数は胃亜全摘 B-I 法 R₂ 郭清であったが、11例に幽門側2/3切除、25例にR₀~R₁の縮小手術がなされた。予後は手術死2、再発死4、他病死6で、他病死を除く5年粗生存率(直接法)は、m 癌93.3%、sm 癌92.0%であった。

8) α-フェトプロテイン産生胃癌の治療経験

小林 美樹・佐藤 鍊一郎 (秋田組合総合病院 外科)
師岡 長・佐藤 攻
倉岡 節夫
曾我 淳 (新潟大学医療技術短期大学部)
上坂 佳敬 (秋田大学医学部第一病理)

65才の女性。食欲不振上腹部不快感を主訴に某医受診。上部消化管造影にて胃癌を疑われ当院受診。生検にてgroup V と胃癌の確診を得た。入院時血清α-フェトプロテイン(AFP)は23108ng/ml と異常高値を示すが、術前検査術中検索にて肝転移を認めず、術後組織学的にAFP産生胃癌と診断した症例に対し胃亜全摘術を施行した。

術後血清AFPは一時減少するも術後3ヶ月頃より再上昇し、術後6ヶ月にてCTにて肝転移を確認された。

肝転移後の経過は急激で急速なる肝転移果の増大を認め、転移確認後約1ヶ月にて死亡した。

9) 胃悪性リンパ腫治療中に早期胃癌を併発した1例について

田中 典生・佐藤 巖 (南部郷総合病院 外科)
鰐淵 勉・鹿嶋 雄治
植木 秀任
豊島 宗厚・小黒 仁 (同 内科)
宮島 透
味岡 洋一 (新潟大学医学部第一病理)